

メッセージアウトライン 創世記9:18～29「ノアの預言」

[18-19]「箱舟から出て来たノアの息子たちは、セム、ハム、ヤフェテであった。ハムはカナン之父である。この三人がノアの息子たちで、彼らから全世界の民が分かれ出た」

全世界を滅ぼした大洪水が終わり、新しい時代が始まった。神は雲の中に虹を現わすことによって、このたびのようにすべての肉なるものを大洪水で滅ぼすようなことはしないとノアたちと契約を結ばれた。人はこの契約のしるしである虹を見るときに神との契約を思い起こすことができるのである。地上にはノアの家族八人しかいない。そしてこのノアの息子三人から全世界の民が分かれ出るのである。それゆえ、人間は進化論の教える、生命のない物から生命が発生し、それが徐々に進化して人間になって増え広がっていったということはいえない。これは創造主なる全知全能の神はいないという前提に立った人間の造り上げた考えなのである。

「ハムはカナン之父である」とあるが、10:6節によれば、カナンはハムの四番目の息子のようである。「ノアは大洪水の後、三百五十年生きた」と9:28節に記されているので、ノアは少なくともハムの息子たち四人が生まれて、彼らが成人になり、その生き方を観察できるまで生きることができたのであろう。さらにその子孫までも見たかもしれない。それゆえ、次節以下の出来事は洪水後何十年もたってからのことであろう。

[20-21]「さて、ノアは農夫となり、ぶどう畑を作り始めた。彼はぶどう酒を飲んで酔い、自分の天幕の中で裸になった」

ぶどうを摘んでその果汁を自然発酵させると、ぶどう酒となる。ぶどう酒の色はその果皮中の色素による。ノアは果物としての、ぶどうを栽培し始めたと思われるが、知るか知らずか副産物としてぶどう酒ができてしまった。あるいは大洪水前からぶどう酒の造り方は人々に知られていたのかもしれない。ノアは大洪水前の墮落し暴虐の満ちていた長い時代を神に従って信仰を持ち、堅く節操を守ってきた人物であるが、大洪水後の平和な時代となり、常に抱いていた警戒心を解き、少し気をゆるめたのかもしれない。そして肉体の楽しみのためにぶどう酒を少し飲んだ。しかし、彼は飲み過ぎてしまったようである。そして身体のはてりのためか着ているものを脱いでしまい、裸になり天幕の中で寝てしまった。

[22-23]「カナン之父ハムは、父の裸を見て、外にいた二人の兄弟に告げた。それで、セムとヤフェテは上着を取って、自分たち二人の肩に掛け、うしろ向きに歩いて行って、父の裸をおおった。彼らは顔を背け、父の裸は見なかった」

ハムはノアから少し離れた所に自分の住まいを持ち、時々、父を訪問して交わりを持っていたと思われる。これはセムやヤフェテも同様であったであろう。ハムが父を訪ねて天幕の中に入った時、そこに父が酔っぱらって裸で寝ているのを見た。ハムにとって父は、言い逆らうことのできない族長としての権威と道徳的、霊的強さを持つ父であり、ハムはそのような父に対して心のどこかで反抗的で、肉体的な思いを持っていたのかもしれない。しかし、今は目の前で、自分の父の肉体的弱さとその失態を見ている。彼は心の中で喜んだのであろう。そして、兄弟たちも同じ満足感を味わうだろうと思い、早速出かけて行って兄弟たちを見つけ、そのことを告げた。しかし、セムとヤフェテはハムとは違った反応をした。彼らは父が脱ぎ捨て

た上着を取ってそれを自分たちの肩に掛け、うしろ向きに歩いて行って、それで父の裸をおおった。彼らは父の裸を好奇心とさげすみの思いで見るとはしなかったのである。彼らは口ではハムを非難しなかったようであるが、それよりもはるかに強い非難をその行動で示した。ハムの父に対する態度は父の権威と道徳基準に対する反抗であり、最終的には父に家長であり族長としての権威を与えている神への反抗であった。

[24-25]「ノアは酔いからさめ、末の息子が自分にしたことを知った。彼は言った。『カナンはのろわれよ。兄たちのしもべのしもべとなるように』」

事件の当事者はハムなのに、なぜその息子のカナンをノアはのろったのか。まだ酔いが残っていたのか。そうではない。これは預言的な内容を持った宣言であり、ハムの息子カナンの生き方に父と同じような不敬虔や罪を見ていたノアが神の御霊に導かれて預言したのである。このような御霊に導かれての預言は聖書にはしばしば出て来る。→創世記48:14~19,49:1~28, I サムエル10:1~12,ルカ1:41~45,67~79,2:25~38

後の時代にカナンの子孫たちが住んだカナンの地は恐るべき性的退廃と偶像礼拝の地となり、イスラエルによる神のさばきの対象となる。このこともノアののろい25節の「兄たち」とはクシュ、ミツライム、プテ(10:6)のことではなく、文脈から見て、セムとヤフェテのことである。「しもべのしもべ」とは最低のしもべを表わす強調的な表現。兄たちに与えられる祝福とは対照的にカナンの子孫は彼らに仕えるしもべとなる。しかしこれは宿命的、機械的に彼らの末路を規定しているのではないことも覚えておかなければならない。カナン人の遊女ラハブは信仰を持って神に従ったがゆえに滅びから救われ、救い主の家系に加えられた。→ヨシュア記2章、マタイ1:5 逆にイスラエル人であるアカンは神に従わず、私利私欲に走ったため、神にさばかれ滅ぼされてしまった。→ヨシュア記7章 どのような人でも悔い改めて神に立ち返るならば、そこに救いと祝福がある。

[26-27]「また言った。『ほむべきかな、セムの神、主。カナンは彼らのしもべとなるように。神がヤフェテを広げ、彼がセムの天幕に住むようになれ。カナンは彼らのしもべとなるように。』」

「カナンは彼らのしもべとなるように」が2回繰り返されているのは、セムとヤフェテへの祝福との違いを対照的に明確にするためである。ノアはセムに対して「ほむべきかな、セムの神、主」

と賛美する。「神」は一般的な神名エロヒーム(普通名詞)であり、「主」は「存在する。ある。」を意味する神名ヤハウエ(固有名詞)であり、契約の当事者であることが強調されている。すなわち、セムに対しては神は契約の神であり、ヤフェテに対しては単に「神」であり契約の神の名が用いられていない。それゆえ、ここに神とセムとの特別な関係が示されていることがわかる。事実、神の契約のもとにセムの子孫からアブラハム、ダビデ、イエス・キリストへと続いていく。→マタイ1:1~16、ルカ3:23~38 「神がヤフェテを広げ、彼がセムの天幕に住むようになれ」

とはヤフェテの地上的繁栄とセムを通しての祝福にあずかることで、それは神の選びの民としてのイスラエル、後にはキリストの教会による福音の伝達を通して霊的な祝福にあずかることであろう。

[28-29]「ノアは大洪水の後、三百五十年生きた。ノアの全生涯は九百五十年であった。こうして彼は死んだ」

ノアは墮落し、暴虐に満ちていた当時の世界で、信仰を持って神に従い続けた。そこには信仰のゆえに受ける多くの困難があったことであろう。また彼の人生の後半は箱舟作りと大洪水の経験、そして新しい世界での生活の開始、息子たちへの祝福とのろい等、多くのことを経験した。しかし、神は彼を最後まで導き、守り、祝福してくださった。彼は九百五十年という長寿を全うし、神のもとに召された。私たちもそれぞれの人生において多くの喜びや苦しみや困難を経験するが信仰の先輩たちに習いつつ、最後まで信仰生活を全うする者になりたい。→ヘブル11:1~12: